



孔

江苏工业学院图书馆

藏书章

#

上

读

新潮社



© Yasushi Inoue 1989,
Printed in Japan

孔子

平成元年 九月十日 発 行
平成二年 三月十五日 第二刷

著 者 井上 靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部〇三二六六一五一一
編集部〇三二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

印刷 二光印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格は函に表示してあります。

ISBN 4-10-302510-7 C0093

孔
子

第一章

一

師・孔子がお亡くなりになった時、私も他の門弟衆に倣って、あの都城の北方、泗水しすいのほとりに築かれた子の墓所の附近に庵いかりを造って、そこで心喪三年に服しましたが、そのあと、この山深い里に居を移し、口に糊するだけの暮しを立てて今日に到っております。早いもので子が御他界あそばされてから、いつか三十三年という歳月が経過しております。その間、世間との交渉はできるだけ避けるように心掛けて参りましたが、それは当然なこと、墓所から遠く離れてこそおれ、一生、命のある限り、ここで亡き師にお仕えしようと思つてゐるからであります。何事につけても、子のお心の内を考え、子のお傍に侍はべつてゐるような思いで、毎日を過しております。それ以外、とるに足らぬ私ごとき者には何もできません。世に益するなど思いもよらぬことでございます。

左様、仰おちしや言る通り、私たちが三年の服喪を終えたあと、高弟子しこう貢が更に三年、前後六年間喪

に服したということは噂にも聞いておりますし、噂に聞くまでもなく、子貢がそのようにするであろうことは、よく判っておりました。私たち七十人ほどの者が三年の服喪を終えた朝、何と言つても物とした気持で、それぞれ思い思いの地に散って行く時、それに先き立って、荷物をとり纏めた者から順番に、子貢の許に別れの挨拶に参りました。三年に亘る喪の一切を取り仕切ってくれたのは子貢ですし、経済的にも子貢の援助がなかったら、私たちの服喪は考えられぬことでした。

子貢の館に入ると、誰も彼もが子貢と抱き合つたり、子貢の傍でお互いが抱き合つたりして、涙ながらの最後の別れを惜しみました。私もまたそのようにしましたが、その時、そこから窓越しに望める子の墓所の傍には、既に子貢のための新しい庵が造られてありました。子貢は四十六歳、更にこれに続く三年を子にお仕えしようというのであります。

私はそうした子貢らしい亡き師への仕え方に、強く心を惹かれるものはありましたが、私などの真似るべきことではありませんでした。更にこれからなお墓側に侍る者があるとすれば、子路、顔回がいは亡きあと、それは子貢であり、しかも子貢一人であるべきであらうかと思われませんでした。

子路、顔回の名を挙げましたが、——兄弟でし子たちの名が現在も消えることなく、あなたさま方のお耳に入っているということは、何とも言えず嬉しいことでございます。子路は六十三歳で、顔回到っては四十一歳の若さで、共に師に先立っております。

私でございますか、私は顔回より五歳年下であります、いつか顔回より三十年、子路より

八年という歳月を長く生きてしまい、今や七十三歳で亡くなられた師・孔子の歿年にさえ近付こうとしております。馬齢を重ねるとするのはこのことで、まことにお恥かしい次第でございます。が、これも天の然らしむるところ、与えられた生を私は私なりに、思い邪よこしまなく生きて行こうと思っております。

ご覧の通り、今は隠者いんじやまがいの日々、僅かな田畑を耕し、なるべく世の汚れに染まらぬようにと、ただそれだけを心掛けて、その日その日を自分本位に送っております。併し、お心のひろい子はお咎めにはならぬであります。お前はそれでいい、そういう子のお声が聞えて参ります。大体、子も本当は現在の私が送り迎えしているような毎日をお持ちになりました。判お持ちになりました。堪まらなかつた！ 私には、私だけには、そうした子のお心の内がよく判っております。

併し、子はそうなさらなかつた。なさることはできなかつた。いつもこの紊れに紊れた世が少しでもよくなるようにと、一人でも不幸な人がなくなるようにと、日夜、そのことに頭をお悩ましになり、その考えを人にお説きになっていらした。この紊れに紊れた世から眼をほかに逸らせてはいけない。どんなことがあつても、人間が生き舞やからいているこの現世から足を外してはいけない。そうではないか、この人という名で呼ばれている輩やからと共に生きるのではなくて、他の何ものと共に生きようというのであるか。所詮、鳥獸の群れに入ることとはできないのだ。——どこか一点、淋しそうなところのある子のお声が聞えて参ります。自分自身に仰言つていゝる子のお声であります。

でも、子は御自分に課しているものを、弟子の仲間にも入れぬような私などにはお求めにならず、ひどく寛大なところがありません。山に入りたければ山に入りなさい。それがいい。そして自分を汚さないで生きなさい。それがいい。この山に入ってから、何度、寛大な優しい子のお声を耳にしたことではありません。

天命とは難しい御質問でございます。ありのままを申し上げれば、子のお口から出たお詞ことばの中で、私などには一番難しく、一番怖ろしく感じられるお詞でございます。一体、天とは何でございます。天、何をか言うや。四時行われ、百物ひやくぶつ生ず。天、何をか言うやと、子は仰言いました。まことにその通りでございます。天は何も申しません。四季の運行は滞りなく行われ、万物は生長する。併し、天は何も申しません。

確かに自分は五十にして天命を知ったと、そういうお詞ことばが子のお口から出たことがあります。亡命・遊説ゆうせつの旅を打ち切つて魯にお帰りになつてから、多勢の門弟衆が侍っている席で、子の口から出たお詞ではなかったかと思ひます。いずれにせよ、晩年のお詞であります。その子のお詞についての御質問かと思ひますが、子はそのお詞を口にお出しになつた時も、いつものことですが、それについては一言も説明なさいませんでした。それぞれ自分で考えよということでございます。

子がお亡くなりになつたあと、服喪の後半期、子貢が中心になつて、生前子がお口から出さ

れたお詞の一つ一つを取り上げ、そのお詞の持つ生命があれこれ論じられた上で、それを正しい形に、子が実際にお口から出されたであろう形に、置き替える作業が行われたことがあります。私も時に、そうした席に入れて貰って傍聴いたしました。

そのような集りが開かれるようになった、ごく初めの頃であつたと思いますが、何夜かに亘つて、天命を知るとか、天命を畏るとか、天とか、命とか、そういう詞が人々の口から出て、あちこち飛び交うなかに坐つていたことがあります。当時私はまだ子がお亡くなりになつたことの悲しみから、完全には立ち上がれないでいる時期で、子の生前のお詞を取り上げて、あれこれ論う一座の空気とは、かなり遠いところにおりましたので、いかなるところに天命の二字が落着いたかは、はっきりとは記憶しておりません。

天命もさることながら、そもそも天とは何でございましょう。子がお考えになつておられた天とは、どのようなものでございましょう。私はこの奥山の里に入りまして三十年程になりませんが、年に何回か、天について考えます。そして子が口に出された天命というお詞の中に入つてゆき、ああでもない、こうでもない、いつも堂々巡りして同じ所に戻つて来ております。御質問に対しては、そうした自分の考えの辿る道すじでも申し上げる他ないようでございします。

併し、まあ、この御質問に対しての私の答えは、暫く控えさせて頂きましょうか。その方が無難のようでございます。一ヵ月か二ヵ月、多少の御猶予を頂戴した上で、私は私なりの考えを纏め、整え、その上で子の天について、天命について、私の考えを述べさせて頂くことに致しますよう。

それはそれと致しまして、子がお亡くなりになってから三十三年、——生前、子が教えを述べられたあの講学の館やかたでは、現在、あなた方、優れた若い方々によって、いろいろな面から子の教えが説かれてしていると聞いております。嬉しいことでもあり、力強いことでもあります。

子が御他界遊ばされたのは、ついこの間のことのように思われますが、三十三年という歲月は何もかもすっかり変えてしまったようでございます。晩年の門弟衆の中には師の歿後、需もとめられて諸侯に仕えた者もありましょうし、また隠かくれて見あらわれぬ者もありましょう。人それぞれでございます。六年に亘つての服喪を果したあと、子貢がそのまま魯都に留まって居りますれば、師歿後の孔門の事情も多少異つたものになっていたかと思ひますが、子貢はもともと衛の人、それにいつか齡も五十に垂たなんとしていた筈で、故国の衛に帰つて行つたことも已むを得ぬことでございます。

それから子夏、子張、子游といった子晩年の門弟たちが、三年の喪を終えたあと、師・講学の館を守っていた一時期がありました。幾つかの派に分れているとか、“礼”に関してそれぞれの解釈、主張が対立しているとか、そのような噂も耳に入っております。併し、いつからともなく、そうした人たちの噂も聞かなくなりました。

左様でございますか、子夏は故国衛へ、子張、子游の場合は、陳、呉という己が故国こそ亡びておれ、それぞれやはり己が生れし郷里へ帰つて行つたといふのでございますか。若いと言つても、みな、私より十歳ほど若いだけのこと、機を得て己が生国へ帰ることは、ごく自然な

成行きであろうかと思ひます。それにしても、そうした優れた門弟衆によつて、黄河、淮水わいすいのあちら、こちらと、中原各地で子の教えは説かれ、大きく、力強く拡つてゆくことでありましよう。

それにしても講学の本拠・魯都に於ては、子に関するすべてが、今やそうした子晩年の門弟たちの手から、今日という時代を脊負つていらつしやる貴方さま方の肩に移されている。子の教えが子の歿後、子のご存じない次代の方々によつて守られ、弘ひろめられてゆく。頼もしいことでございます。

そうでございますか。子のたくさんのお詞ことばのどの一つも消えないように、それを集め、整理していらつしやる！ それからそうした子のお詞についての正しい受けとり方、正しい解釈、——伺つただけでも、大変なお仕事でございます。それにつけても子の生前、お傍にお仕えしただけで、漫然とその日、その日を過したわが身が悔まれてなりません。

それはそれとして、折角お越し頂いたのですから、何かお役に立つことをお話できたらと思ひますが、ここに頂戴している幾つかのお訊ねのうちでは、今日のところは「孔子教団と私との関わりあい」というのを選ばせて頂きましたようか。何も準備はしてありませんが、このようなお訊ねでしたら、一応お話できるかと思ひます。他の立ち入った幾つかの御質問については、次の、あるいは次の次のお越しの折までに、準備させて頂くことに致しましょう。

既にご存じのこととは思ひますが、私は他の門弟衆とは異つて、途中から何となく子の教団に紛れ込み、そのまま居坐つてしまつたような形で、子にお仕えした者でございます。この国

に於ての子の晩年の何年かは、誰に命じられたわけでも、勤められたわけでもなく、勝手に教団の下働きを受持たせて貰つて、少しでも暇ができる、なるべく子のお声の聞えるところに身を置いていようと、ただそれだけのことに気を遣つていた人間でございます。門下生だと申しましたら、子は優しくお笑いになることでありましようし、他の門下生たちは、多少、それは困るといった顔をなさることでありましよう。

まあ、そういう立場の私ではありませんが、お話の順序として、そういう立場の私自身のことからお話させて頂くことに致しましょう。まだ陽が高うございますので、お帰りが暗くならないうち、夕闇が迫る前に、お話を終らせて頂けるかと思ひます。



私の生国は蔡でございます。蔡という己が生国について語るのは何年ぶりかのこと、口にすればやはり砂塵に烟つた土屋の集落と、それを取り巻いている桐の疎林、そしてその桐の林の向うに置かれてゐる汪洋たる汝水の流れが、眼に浮かんで来て、心はしんとしたものに打たれます。

大体、この蔡という国は、周の武王の弟・蔡叔度が、殷の遺民を統治するために、潁水、汝水の河間地域に封じられたことに始まると言われております。その時の都城の地は、私が生れ育つた新蔡ではなく、同じように汝水に沿つてはおりますが、ずっと上流の上蔡でございます。どういふものか、上蔡に国を樹てた蔡叔度は、武王の歿後、周王朝に叛旗を翻し、それに失

敗、ために一時国は絶えるに到ったと言われております。併し、その子・胡が国を再興し、蔡国の命脈だけは曲りなりにも保つことができたようであります。こういうことから考えますと、建国の当初から、この蔡という国は、容易ならぬ、転変の歴史を約束されているかのように思われます。

それは兎も角としまして、上蔡を都としたわが蔡なる国も、初めは周王朝を戴いて、中原諸侯の国の一つとして、歴とした存在であった筈であります。が、それもまあ周王朝盛時のことで、やがて呉、楚などの中原を取り巻く外方そとがたの大国が中原に力を伸ばして来ると、あとは惨憺たる苦難の歴史であります。

苦難の歴史という言い方をすれば、中原諸侯の国のすべてに共通していることでありましょうが、蔡国の場合、その苦難の歴史の大部分は、南に隣りしている夷狄の国・楚との確執が占めております。

蔡国が上蔡を都としていたのは十八代、五百年、その間に南方に大きく蔡を押し包むように拡っている、大国・楚から受けた圧迫の数々は算え切れません。その中でも目立っているのは、十三代哀侯の時、さしたる謂われなくして、楚の文王から大々的討伐を受けたことでありましょうか。当時の蔡の民の悲惨な明暮れは、いろいろな形で語り継がれております。それから降って十八代靈侯の時になると、これまたさしたる謂われなくして、楚の企らみによって靈侯は暗殺され、国は亡ぶるに到っております。この場合は二年後に平侯が新蔡に都を遷すことによつて国を復しておりますが、こうしたことの裏にも亦、楚の力が働いております。

こうなると、国は再興したとは言え、楚の属国としての立場を余儀なくされることは当然で、私などは何かにつけ、そのような国の悲惨な歴史を聞かされて育って参りました。

とまれ、蔡国は十八代、五百年の上蔡時代の幕を閉じると、そのあとは新蔡時代ということになります。新蔡に都が遷されたのは平侯二年（註、紀元前五二九年）、私が生れる十三年前のことです。

私は幼少時代、大人たちからいかに旧都・上蔡がすばらしい都であったかということ、何回聞かされたことでありましょう。それが経た歴史がいかに多難なものであろうと、五百年の王城の地ともなれば、上蔡には上蔡としての、急造の都・新蔡などの持たぬ、それだけのよさはあつたに違いありません。併し、新蔡で生れ、新蔡で育っている私たち若い者には、そうした大人たちの繰言が、一種言い難い哀れさで聞えたものであります。

十二、三歳頃のことでしょうか。一度だけ、子供たち数人が大人たちに連れられて、汝水沿いに北上し、四日目に旧都・上蔡の土を踏んだことがあります。さすがに大きい集落で、入りくんだ路地、路地には商舗が立ち並んでいて、買い出しに来た近郷近在の人たちで、異様な賑わいを見せていました。そこは都が新蔡に遷ったあと、城内から移り住んだ人たちによって、新しく造られた新市街だということでした。

そしてその集落から程遠からぬところに、曾ての上蔡の城邑は半ば廢墟となつて横たわつておりました。大平原のただ中に置かれた廢墟でした。城壕もすっかり埋まり、城壁も菌が脱けたように所々欠け、その欠けた城壁が大廢墟を囲んでおりました。

私たちはそうした城壁の欠片の一つに登りました。眼下には半ば壊れた無人の土屋地帯が、どこまでも拡っており、それを丈高い雑草が埋め、柏、銀杏、槐、柳といった樹木だけがあることに群れをなし、それだけが生い茂って天を衝いております。曾てここに住んだことのある大人たちが懐かしがっている都大路などは、すっかり草叢の中に匿れてしまつて、今は、その片鱗さえも眼にすることはできませんでした。ただ、ざっと見渡しただけで、廢墟は新蔡の城邑の二倍近い大きさはあろうかと思ひました。

城壁の上の歩廊は兵の訓練もできるほど広く、私たちはその広い歩廊の一画に立つて、眼下に真四角に区切られて拡っている旧都の無残な亡骸に見入つておりましたが、その時、たまたま、まだ見たことのないほどの渡り鳥の大群が、幾つかの塊りになつて、それぞれ陣形を整え、大廢墟の上を、次々に斜めに横切つて行きました。それだけが生きていけると言える、渡り鳥の整然たる壮んな眺めは、今もなお強く眼に捺されてあります。

旧都・上蔡の城邑の現在の姿を眼にしたお蔭で、私たち新蔡生れの少年には、新都・新蔡の城邑は充分美しく、充分立派なものに見え、そこに生きること、言い知れぬ悦びと頼もしさを覚えたものであります。

さてお話をもとに戻しましょう。永年に亘つて、何の因縁か楚国に弄め弄め抜かれて来た蔡国ではありますが、新蔡に都を遷してから一度だけ、呉と同盟を結んだというか、呉に強要されたというか、怖らくはその時の情勢いかんともなし難いことであつたかと思ひますが、呉と共に、相手もあろうに楚の国に出兵しております。そして楚の主力を柏挙に破り、漢水を渡つ

て、勝利者として楚都・郢よに入っており。昭侯十三年、新蔡に都替えしてから二十三年ほど経った頃のこと、私の十一歳の時の事件であります。

文字通り俱に天を戴かざる宿敵・楚を破ったということで、国中が異様な昂奮に包まれたことを、子供心によく憶えております。夷狄の国・楚との何百年かに亘る関係に於て、これが、まあ、周王朝の一族、姫姓の国・蔡の、多少でも鬱憤をはらし得ただ一つのことでありましょうか。

併し、この夢のような事件は、聽ていつかは楚によって大きく復讐されねばならぬことでありました。それは十二年後、昭侯二十五年に、有無を言わさぬ決定的な形でやって来しました。突如、都・新蔡の城邑は楚の大軍に囲まれ、都城を楚地深く遷す要求を突き付けられました。勿論、蔡国としては、それを受諾するほかなく、そのために国中が混乱を極めている時期、こんどは新たに呉が介入して来しました。

呉は楚を出し抜いて、何の前触れもなく一夜のうちに、わが新蔡の城邑の中に兵团を入れ、その要求によって、国は遠く呉の勢力下にある州じゅう来なる地に遷都しなければなりません。であつたという間の出来事で、このふしぎな遷都は、私の二十四歳の時のことであります。

都を遷すということは、言うまでもなく国替えることに他なりません。国を替えると言つても、国全体がそっくり引越してできるわけのものではなく、民の半分は生活を移すこと、きず、そのまま新蔡の城邑に遺民として留まる他ありません。